

ヘンリ6世の「列聖」と 中世後期イングランド王権

梁川洋子

はじめに

近年、イングランド国王ヘンリ6世については、その40年に及ぶ治世におけるほとんど唯一の功績はケンブリッジのカレッジ創建であったといわれるほど、政治的に無能な国王であったというイメージが定着しつつある⁽¹⁾。ところが皮肉なことに、この無能な国王が、生前をはるかにしのぐ名声を死後に獲得したのである。死後10年のうちに、ヘンリ6世はイングランドで最もポピュラーな聖人となり、その後50年以上にわたってカンタベリの聖トマス・ベケットをしのぐほど、広く崇敬を集めるようになった⁽²⁾。J. C. ラッセルは、このように、死亡した特定の君主や諸侯が同時代のうちに「聖人」として崇敬される現象を、とくに「政治的聖人 political saint」崇敬と呼んだ。ラッセルによれば、政治的聖人とは、政治闘争において敗北し、悲惨なあるいは暴力的な死を被ったゆえに聖人として崇敬されるようになった人物である。彼らは政治的な殉教者とみなされ、幾人かは広範かつ長期にわたって崇敬を集めた。ラッセルの提唱以後、政治的聖人崇敬はおもに反乱諸侯と王権との対立関係のなかで説明されてきたため、従来の研究では、聖人崇敬の政治的利用を強調する傾向が強かった。そのようななかでS. ウォーカーは、政治的聖人は反乱によって破壊された友愛と調和を回復し、人々の和解と再統一の希望を満たす存在になったと主張した⁽³⁾。しかしながらウォーカーは、このような政治的聖人の崇敬が王権にとってどのような意味を持ったかについては、十分に説明していない。

そこで本稿では、中世後期イングランド王権のありかたを考察する素材の一つとして、ヘンリ6世崇敬とヘンリ7世によるヘンリ6世列聖問題を取り上げ、検討していきたい。

I ヘンリ6世崇敬の発生

ヘンリ6世は、1422年に生後9ヶ月で即位したが、薔薇戦争の渦中の1461

年に、ヨーク家のエドワード4世によって王位を奪われた。ヘンリは北部へ逃亡したが、1465年7月にエドワードに捕らえられた。ところが、フランスへ亡命した王妃マーガレットが、エドワード4世と対立したウォリック伯と結んだことで、ランカスター派が巻き返し、ヘンリも救出されて、1470年10月3日に復位を宣言した。しかしながら、それもつかの間、翌年4月11日には、亡命先から帰国したエドワードによってヘンリは再び捕らえられ、ロンドン塔へ投獄された。2日後、エドワードはバーネットの戦場にヘンリを同行し、ウォリック伯を倒した後、ヘンリを再びロンドン塔へ戻した。さらにエドワードは、5月4日にテュークスベリの戦いで王妃マーガレットらランカスター派残党を打ち破った。ヘンリの皇太子エドワードは戦死し、マーガレットは捕らえられて、後にフランスへ帰された。そして、エドワードがテュークスベリからロンドンへ凱旋した5月21日のまさにその夜、ヘンリ6世は幽閉されていたロンドン塔内で死亡した。ヘンリの遺体は、ロンドン市内のセント・ポールズの境内で一晩さらされた後、翌5月23日にはテムズ沿岸のチャートシー修道院 Chertsey abbey へ水路運ばれ、そこに埋葬された。ヘンリの葬儀は、エドワード4世によって、それなりに丁重におこなわれたようである。財務府の支出記録には、ヘンリの埋葬用のオランダ製リネンや香料その他の購入費、カレー守備隊による遺体の監視およびチャートシーまでの搬送費用、葬儀ミサをあげたロンドンの4修道会への支払として、総額33ポンド余が計上されている⁽⁴⁾。

ヘンリの死がおおやけになった直後から、ヘンリ6世は殺害されたのだという噂が巷間に流れていた。日付の明確な史料としては、駐仏ミラノ大使がミラノ公フランチェスコ・スフォルツァに宛てた1471年6月17日付けの報告がある。このなかで大使は、エドワード4世が、もはやヘンリを監禁しておくことはせず、「ヘンリはある意味で無実であり、彼の息子とウォリック伯が、彼に味方し何らかの力を持っていた人々すべてと同様に死亡したうへは、彼の行動について何ら大きな不安はなかったにもかかわらず、ヘンリ王を、囚人となっていたロンドン塔で密かに暗殺させた⁽⁵⁾」と述べている。このミラノ大使の報告では、殺害の下手人は特定されていない。同時代に書かれた『クロウランド年代記 続編』にも、「主の聖別された人物に敢えて神聖冒瀆の手を置いた者が誰であれ、神が彼に慈悲と改悛の猶予を与えたまわんことを」とあるが、著者は「ヘンリ [6世] 王の息絶えた身体がロンドン塔で発見されたことについて、今は黙する」とし、かなり慎重である⁽⁶⁾。

一方、同じく同時代のウォークワースの年代記には、「エドワード王がロンドンへ来た同じ日の夜に、ロンドンの塔の牢に入っていたヘンリ王が死亡した。それは5月21日火曜日11時から12時の間であった。そのとき塔にはエドワード王の弟グロスター公その他がいた…翌日、ヘンリは棺に入れられてセ

ント・ポールズへ運ばれ、彼の顔は皆に見えるようにさらされた。そして横たわったまま、ヘンリは床に出血した。その後、ブラックフライアーズへ運ばれ、そこでヘンリは新たに出血した」と、ヘンリが刺殺されたことと、王弟グロスター公リチャード（後のリチャード3世）が犯人であることが暗示されている⁽⁷⁾。同じく15世紀末に書かれたとされる『大ロンドン年代記』でも、グロスター公が下手下であるとされている。そして、ヘンリの遺体はボートでテムズ川を「チャートシーへと運ばれ、そこに埋葬された。ヘンリのために、その後まもなく、神は様々な奇跡を示した」とし、埋葬直後からヘンリ6世による奇跡が生じていたことを記している⁽⁸⁾。

これらヘンリ殺害説に対して、同じく同時代の年代記とされる『エドワード4世の到着』では、息子エドワードの戦死と妃マーガレットの逮捕をはじめ、ランカスター派が「滅亡し、いかなる復活の希望もなしに、永遠に鎮圧されたこと」を知らされたヘンリは、「あまりに大きな憎悪、怒り、憤りでもってそれを受け止めたため、純粋な絶望と憂鬱から、5月23日に死亡した」とする⁽⁹⁾。そして「国王 [エドワード4世] は彼の遺体をロンドンの説教修道会へ運ばせ、そこで彼の葬儀ミサが行われた。それから遺体は、ロンドンから16マイルのテムズ沿岸にあるチャートシーと呼ばれる修道院へ水路運ばれ、そこに恭しく埋葬された」とし、先に挙げた年代記の記述と趣を異にする。この『エドワード4世の到着』は、冒頭に「エドワード4世はヘンリ6世と呼ばれるヘンリによって篡奪され、占有されていた彼の王国を取り戻すために海を渡って帰国した」とあるように⁽¹⁰⁾、ヨーク派寄りの年代記であるため、ヘンリ死亡に関する記述も、エドワード4世側の公式見解とみなされている。

しかしながら、民衆は殺害説のほうを好んだようである。なぜなら、カヴァシャムの聖母礼拝堂に、いつのまにか「ヘンリを殺害した凶器の短刀」が展示されたからである。この短刀は「聖遺物」として礼拝堂に保管され、宗教改革時に押収されるまで、長く崇敬を集めた⁽¹¹⁾。さらに、ヨーク・ミンスターでは1473年頃までに「ヘンリ王の肖像の前で奉納する」人々が集まるようになった⁽¹²⁾。1475年頃には、ヨークの司祭長リチャード・アンドルーによって「ヘンリ6世と王妃マーガレットの魂のために」寄進供養礼拝堂がミンスター内に創建された⁽¹³⁾。

また、ジョン・ブラクマンによって、少なくとも1485年以前、おそらく1480年頃に、ヘンリ6世伝が書かれた⁽¹⁴⁾。ブラクマンは、かつてヘンリの身近に仕えた聖職者の一人で、1460年頃から約20年間カルトゥジア修道会に所属していた人物とされる。ブラクマンは、ヘンリの元側近からの証言も紹介しつつ、生前のヘンリを極めて敬虔で慈悲深い人物、「第二のヨブ」として描いた⁽¹⁵⁾。これは、すでにヘンリの墓で奇跡が起こっていた当時においては、生

前からのヘンリの聖性を確証するものとなったであろう。

このようなヘンリ6世崇敬の広まりに対して、1471年にエドワード4世は「巡礼の理由、目的地、および出身地を明記した玉璽による許可状をもたない巡礼」を禁止した⁽¹⁶⁾。また、1479年にヨーク大司教は、「いかなる死者も、いかにその生涯の善行が多くとも、教会とローマ教皇とによって祝福されない限りは、そしてその死者の名がローマ教皇の聖人カタログに記載されない限りは、あたかも聖人であるかのように、おおやけに敬ったり、あるいはおおやけに供物を捧げてはならない」にもかかわらず、しかもヘンリ「王の遺体はそこにはなく、別の場所に葬られている」にもかかわらず、人々が「ヘンリ6世の彫像あるいは画像がわがヨーク大司教教会内に設置されていた場所を敬い、また同所におおやけに供物を捧げることを敢えてしている」ことを批判した。そしてヘンリは、正統な王ではなく「事実上の王」にすぎなかったとし、このようなヘンリ崇敬は現国王エドワード4世を軽んじるものであると断じた。それゆえ大司教は、司祭長以下に「わがヨーク大司教教会内における上述の場所に対するこのような崇敬から遠ざかるように」命じ、管区内の一般信徒に対しては、命令違反には厳罰をもって処することを通告した⁽¹⁷⁾。さらに1480年にエドワード4世は、ロンドンの服地商組合に対して、メンバーがチャートシーへ巡礼することを止めさせるよう要請した⁽¹⁸⁾。

このようにエドワード4世は、ヘンリ6世崇敬の禁止、抑制に努めた。ところが、そのエドワード4世の息子を廃し、エドワードの政策に不満を持っていた貴族らの協力を得て1483年に即位したりチャード3世は、1484年8月にヘンリの遺体をチャートシーからウィンザー城の聖ジョージ礼拝堂主祭壇南側へ移葬した。聖ジョージ礼拝堂は、周知のようにガーター騎士団に関わる礼拝堂であるうえ、エドワード4世が改築して自らそこに葬られていた。このような礼拝堂にヘンリ6世の遺体を移葬したりチャード3世の動機については、別稿で考察したように、ヘンリ6世崇敬を保護することによって、エドワードの政策との決別と、ランカスター派との和解を明示しようとしたものであった⁽¹⁹⁾。

さて、ウィンザーへ移葬するためにチャートシーの墓で遺体が発掘されたとき、ヘンリの遺体は芳香をはなち、ひげや髪も損なわれずに、いくらか痩せただけの姿であったといわれる⁽²⁰⁾。このような遺体の自然な芳香や無欠損は、聖性の証とされた要素である⁽²¹⁾。ただし、これを記しているジョン・ラウスは、他方でリチャード3世の怪物伝説、すなわち2年以上母親の胎内にいて髪と歯が生えた状態で生まれてきた、という話を書いている⁽²²⁾。それゆえどちらの記述もテューダー朝下のプロパガンダの1つとみなすべきであろう。

1485年にリチャードを倒し、「ランカスター家の相続人」を自称するヘンリ7世が即位すると、ヘンリ6世崇敬はさらに拡大した。ウィンザーには、まず

ます多くの巡礼が集まるようになった。ウィンザーでは、生前のヘンリの持ち物、とくに拍車と赤いベルベットの帽子が「聖遺物」とされた。なかでも、帽子をかぶると頭痛に効くとされていた。ウィンザーへ到着した巡礼者は、拍車に接吻し、帽子をかぶり、キャンドルをささげ、ヘンリの頭文字 H をあしらった賽銭箱に奉納した⁽²³⁾。そして巡礼みやげにバッジを購入して帰った。ウィンザーで販売されていたバッジには、おもに人物像を象ったものとメダル型のものがあった。人物像型は、イングランドに伝統的なものとされるが、メダル型は 15 世紀末頃から大陸での流行を受けてイングランドでも作成されるようになったもので、帽子飾りとしても使われた⁽²⁴⁾。このようなヘンリ 6 世の巡礼バッジは、1978 年の時点で約 90 個が確認されていた。これは、350 年にわたる巡礼地であったカンタベリーの巡礼バッジが同時点で約 300 個発見されていたことと比べて、50 年程度しか存続しなかったヘンリ 6 世崇敬の痕跡としては、かなり多いといえる⁽²⁵⁾。その後 1990 年代までのあいだに、ヘンリ 6 世のバッジは、合わせて 300 個以上もロンドンのテムズ川沿岸で発掘されている⁽²⁶⁾。

1490 年頃にはウィンザーで、ヘンリ 6 世を聖人として敬う人々の様子を描写した木版画が作成された。現存する図には、王に扮した人物が中央に立ち、足元にはうずくまるカモシカが描かれている。周囲には矢やナイフが体に突き刺さった男女など、ヘンリの奇跡によって救われたことを表わす人々が、ひざまずいて彼を礼拝している。背後の棚には、奇跡発現の場面を象った蠟模型と思われる人体や馬、船のほか、杖、絞首索など、「奇跡の証拠の品々 ex voto」が多数飾られている⁽²⁷⁾。

ヘンリを聖人として称える詩や祈りも作られ、その幾つかは 15～16 世紀のジェントリ家門であるトレヴェリヤン家の書簡集のなかに現存している。このなかで「彼 [ヘンリ] を通じて盲人は光を受け取り、不具者はまっすぐ立つ、そして負傷者は休息を得る、病者は回復する」とヘンリの奇跡がうたわれ、ヘンリは「力ある守護聖人」「我々の支え」と称えられた⁽²⁸⁾。リボンでは 1502 年頃に堂内のヘンリ 6 世の肖像への奉納がおこなわれるようになっていたのをはじめとして、ヘンリ 6 世を描いたステンドグラスや絵画、タペストリーが多くの教会堂を飾った⁽²⁹⁾。そして、ウィンザーでは、奇跡の報告が蓄積されていった。

II ヘンリ 6 世の奇跡

それでは、どのような奇跡がヘンリ 6 世のとりなしによって生じたのか。史料としては、1500 年頃にウィンザーで編纂されたとされる『奇跡録』が現存

している⁽³⁰⁾。その内容は、もともとチャートシーやウィンザーに蓄積されていた英語の奇跡記録から抜粋し、ラテン語に翻訳して編纂されたものである。ラテン語版には、1481年から1500年までの計174件の奇跡が、6巻に分けて収録されているので、ヘンリ6世の遺体がまだチャートシーにあった間に生じた奇跡も、数件含まれている。各奇跡の記述は概要と本文からなるが、全174件のうち36件は概要部分しか記されておらず、編纂作業は未完であったようである。オリジナルの英語版は、ラテン語版の第2巻以降の各奇跡に振られた複数の番号から、少なくとも368件、P. グロジャンによればおそらく590件も記録されていたとみられるが⁽³¹⁾、残念ながら現存しない。このラテン語版の編纂を依頼した者は、ウィンザーの司祭長ジョン・モーガンであると冒頭の献辞に述べられている。しかし、実際に編纂・翻訳作業にあたった人物については、「卑しき修道士 pauperculus monachus」とあるだけで、氏名や立場など詳細は不明である。

この『奇跡録』は、16世紀にトマス・クランマーが所蔵し、その後17世紀に国王ジェイムズ1世が手に入れ、最終的に大英博物館に収められたものとされる⁽³²⁾。従来から一般に、これはヘンリ7世による列聖請願をうけて、教皇がヘンリ6世の奇跡の詳細を調査するよう命じたことに対応して、ウィンザーで編纂されたものといわれているが、このように編纂以来英国に保存されていたことから、結局教皇庁へは提出されなかったと考えられる。そこで、R. ノックスとS. レスリーは、ヘンリ6世の遺体をウィンザーからウェストミンスターへ移葬する計画が進行していた1500年頃に、ウィンザーの参事会員らが、ヘンリの奇跡を宣伝し、移葬に反対するために編纂したという⁽³³⁾。また近年、A. ハナムは、説教につかう資料集として作成されたのではないかと推測している⁽³⁴⁾。

また、『奇跡録』には、一部に奇跡の追跡調査の結果が、少し後の手で欄外に書き込まれている。ノックスらは編纂から一世代後、おそらく1520年代に追跡調査がおこなわれたとみている⁽³⁵⁾。追跡調査は、全174件中84件についておこなわれており、うち23件が「証明 Probatum」された。証明されるには、1件の奇跡につき3名の証人が必要とされたうえ、調査は地理的な偏りが著しく、全国で網羅的におこなわれたものではなかったため、証明された件数は少ない。

ヘンリ6世の奇跡の種類と生じた場所および追跡調査の結果については、表の通りである。『奇跡録』には全174件のうち、138件に地名が記載されており、2件を除いて地域が特定できる。本稿では、ヘンリ崇敬が広まっていた範囲を示すため、巡礼者がウィンザーにおいて、あるいはウィンザーへ向かう途中で奇跡をうけた事例も、その巡礼者の出身地の地名を採用した。その結果、

表 ヘンリ6世の奇跡

地域	種類	総数	病氣治癒	不具の治癒	狂気治癒	負傷治癒・負傷防止	事故救出	水難救出・窒息死蘇生	火災鎮火・火事救出	自殺防止	冤罪救済	安全な航海	家畜・積荷・失せ物	罰と救済	安産・死産蘇生	年代		追跡調査なし	調査あり証明	調査あり証明されず	奇跡番号			
																Richard III	Henry VII							
Bedford		1			1												1	1			48			
Berkshire		5			1	2		2									4	1		2	3	20, 38, 51, 55, 119		
Buckingham		2		2													2		2			32, 105		
Cambridge		4	1		1			1		1							4		2	1	1	40, 50, 95, 99		
Cheshire		2		2														2		2		136, 163		
Cornwall		2	1														2		1		1	43, 88		
Cumberland		0																						
Derby		0																						
Devon		3		2		1												3		2		1	126, 150, 160	
Dorset		3						2							1			3			3	114, 120, 151		
Durham		1				1												1				1	103	
Essex		10	2	1		2	2				1		1	1			4	5	1	4	1	5	15, 24, 28, 41, 52, 59, 85, 98, 118, 141	
Exeter		0																						
Gloucester		0																						
Hampshire		6	1	1			2						2				2	4		3	1	2	5, 6, 7, 34, 108, 135	
Hertford		2	1						1									1	1		2		54, 147	
Huntingdon		2				1							1					1	1		2		92, 144	
Hereford		0																						
Kent		16	5	2		3	1	3						2			5	11				7	9	1, 10, 12, 27, 42, 45, 97, 100, 111, 115, 122, 131, 138, 161, 165, 166
Lancashire		2		1		1												2		2				133, 158
Leicester		3	1			1				1							1	2		3				18, 26, 110
Lincoln		1	1															1			1			123
London		14	6	1	1	2		3		1							4	10		5	1	8		25, 35, 39, 93, 101, 107, 112, 113, 116, 117, 152, 155, 156, 162
Middlesex		3	2			1												3		2	1			13, 23, 132
Northampton		6	1	1	1		1	2									3	3		6				2, 29, 57, 109, 140, 142
Norfolk		2						1					1					1	1			2		96, 124
Nottingham		2				1			1									2						89, 91
Northumberland		0																						
Oxford		6	3	1			1					1					4	2		1	1	4		36, 44, 47, 58, 164, 154
Rutland		2				2												1	1		2			90, 130
Salopshire		2		2														1	1		2			31, 149
Somerset		4	1			1		1				1						3	1	1	1	2		3, 139, 153, 174
Stafford		1																1		1				137
Suffolk		1	1															1			1			49
Surry		4	2			1						1						1	3		2	2		9, 37, 121, 145
Sussex		13	3	2	1	3	2	2									2	11		2	4	7		8, 11, 14, 16, 94, 102, 104, 125, 127, 134, 143, 157, 159
Warwick		2		1										1				2			2			33, 53
Westmorland		2	1	1														1	1		2			19, 56
Wiltshire		5	3			1				1								1	4		1	4		4, 17, 106, 128, 146
Worcester		2	2															1		1	1	1		46, 129
Yorkshire		0																						
Isle of Wight		1					1											1			1			21
Wales		1				1												1			1			22
Calais		2		1	1													1	1		2			30, 148
不明		34	7	3	3	7	2	1		1	3	1	1	1	1	1	3				34			60~84, 86, 87, 167~173
合計		174	44	26	8	34	12	16	4	3	6	3	8	5	2	3	54	83	37	59	23	56		

付記: *Miracula*, pp. 1-307 より作成。なお、奇跡番号はグロジャンによる。

崇敬はイングランド中南部地方を中心に広がっていたことが分かる。さらに、崇敬はワイト島やカレーなどにも及んでいた。

表に明らかであるように、奇跡の種類として病気の治癒がもっとも多いことなどは、他の従来の聖人と変わらない傾向であるといえよう。また、ヘンリを侮辱する言葉を口にした人物が、罰としてヘンリによって病に落とされ、改心すると即座に癒されたという例は、ヘンリに限らず、中世の聖人崇敬にはよく見られるエピソードである⁽³⁶⁾。失せ物の発見も同様である。ヘンリ6世のように男性の聖人による奇跡に、少ないとはいえ安産や死産からの蘇生が含まれるのは、奇妙かもしれないが、ヘンリと同じく政治的聖人であったランカスター伯トマス・オブ・ベルトも、出産の際の危険を防ぐ聖遺物とされていたので⁽³⁷⁾、聖人自身の性別はあまり関係がなかったであろう。

それでは、ヘンリによる奇跡のなかに、彼がとくに「政治的な」聖人であったことを示す例はあるだろうか。たとえば、病気の治癒44件には2件の瘰癧治癒が含まれるが、そのうち1件は、ケントのチャーチ・ハニーバーンで1484年に起こった。すなわち、この町のアグネス・フリーマンという9歳の少女は、「喉に恐ろしい腫瘍が出来て、ほぼ1ヶ月の間も苦しむほど」の病、すなわち「王の病と一般に呼ばれている瘰癧」に陥り、「その病は、王の威厳の助力と祝福が分かたれるのでなければ、極めて稀にしか治らないと思われている。それゆえ皆は、この少女の両親に王国の篡奪から2年目を過ごしていたリチャード王 [3世] の御前へ行って娘のために彼の恩顧を懇願するようにと助言した。」しかし、アグネスの両親は、「その助言を無視した、あるいは、そのような威厳の高みを敢えて試すようなことはしないと」言っ、現国王リチャード3世に頼らなかつた。そしてむしろ、「この最も祝福された最高の尊敬に値する人物のもとへ、奉獻された供物がうずたかく積まれている、彼の聖なる遺体の聖所へと、我が子とともに行くことを決心」し、彼らが誓いを述べるや否や、「少女の喉から多量の膿が飛び出し、噴出し始め、彼女は約4日のうちに完全な健康を取り戻した。それによって、あの聖なるヘンリ王が、命を奪われたとはいえ、決してあの王の癒す力を失ってはいなかつたことを、ましてや死んだ王の力は生きていた王の力よりも効果的であることを、証明した」のである⁽³⁸⁾。このように、簡単な事実の描写ではなく、奇跡の詳しい内容を記す部分は、政治的な主観が込められたものといえよう。

また、「冤罪からの救済」のうち2件は、ともにリチャード3世治世のものであり、かつ追跡調査で証明されている。たとえば、リチャード・ベイズは、「ストウトンと呼ばれるジェントルマン」に献酌係として仕える若者であったが、主君に敵対するジェントルマンの企みによって、ソールスベリで強盗の罪で告発された。敵が「若者を有罪にして死刑を判決するように、12人の陪審

を、脅迫によってか賄路によってかあるいは正義を装うことによってか分からないが、取り込」んだため、若者は強盗犯として死刑判決を下された。そして「役人たちはためらうことなく彼に絞首索を巻き付け、彼はすぐに丈夫なロープで締めつけられた。そこで、梯子が取り去られると、身体全体の重みが首だけでぶら下がった。」見物人らは皆、彼が死亡したと信じたが、「その瞬間に、キリストの最も愛すべき僕にして救いの助けをもたらす人であるヘンリ王が現れたのである。彼は若者には次のように見えた。すなわち、明るく長身で成年の顔つきであるが、いくらか痩せた顔立ちをし、頭は立派な灰色の髪に覆われ、忘れ難い姿をしていた。王の装束で飾られ、青いベルベットのマントをまとうていた。そして、王の姿そのものが多くの人に喜びをもたらしたほど、恭しく誇り高い様子であった。」王は、「首とロープとの間に右手を入れて、ロープが彼を締めつけて窒息させないように守った。」さらに若者のもとへ聖母が、「金糸で織られた白いマントを着て」現われ、「彼の側の地面に立って彼を支え、手を彼の脚の下に置いた。」その結果、彼は「すでにそこで約1時間も吊るされており、生命や意識の徴候をまったく示していなかった」にもかかわらず、役人がロープを切って遺体を地面に落とすと、若者は「その場で生き返った」のであった⁽³⁹⁾。このような奇跡は、ヘンリ6世が生前王位を奪われたあげくに「殺害される」という悲運を被ったゆえに、とくに不正に苦しむ人々に恩恵をあたえる聖人になったとみなされていたことを示し、政治的聖人崇敬の特徴の1つであるといえる⁽⁴⁰⁾。さらに、これは上述のアグネスの奇跡とともに、リチャード3世の不正な王位と統治を批判する奇跡とみなすことができる。

そのほか、猛犬を連れた男たちに襲われて重傷を負ったトマス・ステイブルトン⁽⁴¹⁾は、外科手術をうけたものの経過が悪く、傷口が化膿して壊疽になるほどで、死ぬことは確実であると思われていた。しかし、そこへ訪れた人物が、かつてトマスの父はヘンリ6世のために戦って戦死したことを彼に思い出させ、ヘンリのためにペニー貨を曲げるよう教えた。そこでトマスはコインを曲げつつヘンリに祈った。すると、化膿していた傷口が開き、数日で癒えた⁽⁴¹⁾。

このようにいくつかヘンリ6世崇敬の「政治性」を窺わせる奇跡はあるものの、全体としては従来の聖人崇敬と同様、治癒の奇跡が圧倒的に多数であった。ただし、リチャード3世治世に奇跡の報告数が多いこと自体が、民衆の反リチャード感情を表わしているとも考えられる。

時にヘンリは、従来の有力聖人さえしのぐ力を発揮した。たとえば、カンタベリ巡礼のみやげのバッジを喉に詰めて窒息死した幼児は、ヘンリのおかげで生き返った⁽⁴²⁾。カンタベリは、言うまでもなく聖ベケット崇敬の本拠地であるが、実際、地理的な分布でもケントでの奇跡が多いことから、確かにヘン

り6世崇敬はベケットをしのぐ勢いであったといえるであろう。また、ヘンリは、聖アントニウス専門の病気で「聖アントニウスの火」とよばれた麦角病をも癒した⁽⁴³⁾。これらは、より新しい聖人のほうが、より効果が高いとみなす傾向があったためであろう。疫病や幼児死を免れることは、当時の人々にとってもっとも切実な事柄であった。

また、『奇跡録』から当時の信仰の慣行が窺われる。たとえば、奇跡は多くの場合、トマス・ステイプルトンのように、ペニー貨を曲げつつヘンリにとりなしを祈ったり、ヘンリの墓所への巡礼を誓ったりした瞬間に、あるいは等身大の奉納用キャンドルを作るために患者や死者の体長を計測した時に、直ちに生じた。こうしたコイン曲げや体長の計測などの慣行は、イングランドに特徴的なものであったとされる⁽⁴⁴⁾。また、たとえば1492年に、8才の少年が荷車に轢かれたとき、その場にいた彼の父親とその仲間たちが、とっさに「ヘンリ王よ、ヘンリ王よ、汝の助けを与えたまえ、良き王、聖なる王、最上の王よ、助けたまえ」と祈ったおかげで、命を救われた⁽⁴⁵⁾。あるいは、1486年のアリス・ニューネットは、疫病で死亡したとみなされ、屍衣に包まれていたにもかかわらず、絹の衣と金冠をつけたヘンリの姿を幻視し、それによって健康を回復した⁽⁴⁶⁾。その他に、37年間も耳に詰まった豆のために聾であったリチャード・デニスは、ヘンリのために火曜日に断食することによって聴力を回復した⁽⁴⁷⁾。

そして、奇跡を得た人々は、御礼参りとしてウィンザーへ巡礼し、曲げたペニー貨や事件の場面を象った蠟模型、キャンドルなどの奇跡の証拠品を奉納した。奇跡が生じたことがウィンザーの係官に報告されると、テ・デウムがうたわれ、周知された。このような証拠品やテ・デウムに接して、居合わせた巡礼者のあいだに奇跡の連鎖反応が生じたことであろう。

奇跡が起こった人々のうち、男性は112名で、うち28名が少年であり、女性は49名で、うち23名が少女であった。残り13は家畜や家屋などである。とくに幼児にまつわる奇跡が多いことが、特徴的である。ヘンリ6世と同様に政治的聖人として崇敬を集め、奇跡録も現存している13世紀のシモン・ド・モンフォールについては、とくに男性の信者が多く、なかでも貴族や高位聖職者など身分の高い人々が多いことが特徴であった⁽⁴⁸⁾。これに比べて、ヘンリ6世の信者の場合は、ジェントリや王の廷臣が数名いるものの、大部分は市民や農民のほか、荷車屋や人夫、船乗り、あるいは教区司祭などである。ヘンリ6世のほうは、とくに民衆に支持された聖人であったといえよう。

しかも、奇跡はしばしば、そこに居合わせた人々全員が心を合わせてヘンリに祈ることで、生じた。そして様々な階層と地域の出身の人々が、男女を問わず、ヘンリ6世の奇跡の恩恵を受け、ウィンザーへ巡礼した。その死を悼み、

ヘンリが今や天で神の側にいることを確信しつつ、とりなしを願うあるいは感謝するその精神において、人々は一体となったのである。

このようにヘンリ6世崇敬は、広く民衆に支持されていたが、ヘンリ7世の即位を機に、奇跡の報告数が増加したように、ますます盛り上がった。そしてこの崇敬を、ヘンリ7世自身が政治的に利用するようになる。これについては、次章以下で見ていくことにする。

Ⅲ ヘンリ6世崇敬とテューダー王権

上述のように、ヘンリ6世崇敬は、ヨーク朝を通じて継続し、ランカスター家の相続人を自認するヘンリ7世の即位によってさらに発展した。

ヘンリ7世は、即位後まもなく、叔父ヘンリ6世の列聖を企図した⁽⁴⁹⁾。そして、少なくとも1490年までに、教皇インノケンティウス8世に対して最初の列聖要請をおこなった。さらに後任の教皇アレクサンデル6世にも、要請を繰り返した。すなわちヘンリ7世は、「イングランド国王ヘンリ6世は、生前にその生活の神聖さと、その優れた倫理的資質と、その隣人への熱烈な慈悲と、あらゆる徳と聖性とでよく知られていた」うえ、「断食と禁欲の実行に精を出し、祈りと慈悲の業に傾倒し、貧しい学者の養成のために2つの偉大な有名なカレッジをイングランドに創建し、全能なる主とその栄光ある聖母に捧げた」として、ヘンリ6世を称えた。そして「ヘンリ6世が生きていた間にもまた死後にも、主が彼の徳ととりなしによって、多くの明らかな奇跡を働き、かつ今日までも働いてい」て、「しかるべき献身でもって彼の墓へと近づくと、故ヘンリ王のとりなしと神の働きによって、盲人は見えるように、聾者は聞こえるように、跛者は歩けるようになり、あらゆる種類の病気が癒され、健康を取り戻すと言われ、この種の噂は、王国全体のみならず、他の近隣地域においてさえ、語られている」としてウィンザーでの奇跡を宣伝し、「ヘンリ王は聖人カタログに記載されるに値する」と訴えた。この要請を受けたアレクサンデルは、1494年に、「サリ司教区の、故ヘンリ王の遺体が埋葬されているウィンザー城の共住聖職者教会へ自ら赴き、彼の生活、徳、聖性、慈悲、神への献身、善行と、生前ならびに死後の奇跡および他の必要な事柄について調査するように。そして、しかるべき宣誓をした正当な人々の証言を集め、場所、日時、氏名、[奇跡を]知った理由その他必要な事柄を誠実に調査するように」カンタベリー大司教とグラム司教に対して命じた⁽⁵⁰⁾。

しかしながら、1503年にアレクサンデルは死亡し、次のピウス3世も短命に終わったため、ヘンリ7世は、新たな教皇ユリウス2世に対して、改めて列聖要請を繰り返さねばならなかった。ユリウスは、ヘンリ7世からのこの再度

の要請に応じて、1504年にカンタベリ大司教以下、ロンドン、ダラム、ウィンチェスターの各司教に奇跡の調査を命じた⁽⁵¹⁾。

さらにヘンリ7世は、列聖要請と並行して、ヘンリ6世が葬られているウィンザーの聖ジョージ礼拝堂を改築し、新たに聖母礼拝堂とホスピタルを建設することを計画しはじめた。ヘンリ7世は、聖なる叔父と自分自身とのために立派な墓所を作ろうと考えていたようである。この計画に対して教皇は、1494年に2つの修道院を没収して、新礼拝堂とホスピタルの建設資金に充当することと、その礼拝堂にローマにあるトレ・フォンタネ教会のスカラ・カエリ礼拝所 Capella Scalae Coeli で与えられているものと同じ贖宥をみとめることを内容とする勅書を与えた⁽⁵²⁾。

ウィンザーでの改築と並んで、ヘンリ6世の遺体の再移葬も検討され始めた。その際、チャートシー修道院長、ウィンザー司祭長、ウェストminster修道院長の3者の間で、ヘンリ6世の遺体の所有権を巡って論争が生じた。ウェストminsterは、自院が歴代イングランド国王の墓所であることと、何よりも生前のヘンリ6世自身がウェストminsterへの埋葬を望んでいたことを主張して、自院への移葬を要求した。これに対してチャートシーは、ウィンザーへの移葬はリチャード3世が無断でおこなったものであるとして、遺体の先有権と返還を主張した。当然ながらウィンザーはどちらの主張にも反対した。ヘンリ7世臨席のもと1498年の春に討議が重ねられた結果、「ヘンリ6世自身が生前からウェストminsterへの埋葬を望み、とくに父王ヘンリ5世の墓と聖エドワードの墓の側へ埋葬されるように、ヘンリ6世自らその場所に印をつけた」というような当時の目撃証言を集めたウェストminsterの主張がとおった⁽⁵³⁾。この決定により、ウィンザーでおこなっていた礼拝堂の新築工事は中断され、今度はウェストminsterで聖母礼拝堂の建設が開始された。ウェストminster側は、移葬費用として500ポンドを負担することを王と契約し、この金額は実際に支払われたようである⁽⁵⁴⁾。

このようにヘンリ7世は、ヘンリ6世崇敬を推進したが、王妃エリザベス・オブ・ヨークもまた、それを支えた。エリザベスは、1502年にウィンザーのヘンリ6世に2シリング6ペンスを奉納したほか、ヘンリを殺害した凶器とされる短刀が飾られていたカヴァシャムの礼拝堂へも同額を、さらにヘンリ6世の皇太子エドワードが崇敬されていたテュークスベリへも、5シリングを奉納した。因みに、当時聖母崇敬の中心地であったウォルシンガムの聖母へは、エリザベスは6シリング8ペンス奉納しており、5シリングはそれに次ぐ高額である⁽⁵⁵⁾。

しかしながらヘンリ7世は、遺言状に「聖なる叔父ヘンリ6世王の遺体と遺物を迅速にウェストminster修道院へ移すように」と定めたように⁽⁵⁶⁾、最

後まで移葬の実現を希望しながら、果たせぬまま、1509年に死亡した。

王位を継承したヘンリ8世は、ヘンリ6世の移葬および列聖問題をも継承した。ジョン・ブラクマンによるヘンリ6世伝が、1510年頃に、ロバート・コプランドによって出版されたのは⁽⁵⁷⁾、一連の列聖キャンペーンにあわせたものと考えられる。また、1515～6年にヨーク・ミンスターでは、「ヘンリ王の肖像画」作成費としてヨークのジョン・ペインターに20シリングが支払われた⁽⁵⁸⁾。

さらに1528年の時点でも、本来はヘンリ8世の離婚問題を討議するためにローマへ派遣されていたガードナー・フォクス博士とサー・グレゴリ・ケイソルから、「教皇陛下は、列聖手続きを短縮することには極めて満足しているが、その問題は多くの枢機卿によってこちらで検分されねばならないと答えた」との報告がウルジー枢機卿に届いた⁽⁵⁹⁾。列聖問題は、依然として教皇庁の判断を待っている状態であった。しかしながら、その翌年にはウルジーが失脚し、まもなくヘンリ8世はローマと断絶することになったため、ヘンリ6世列聖交渉も途絶してしまう。ヘンリ8世自身が、1529年にウィンザーへ巡礼し、20シリングを奉納したにもかかわらず⁽⁶⁰⁾、もはやイングランド王権の関心は、宗教改革へと移ったのである。そしてヘンリ8世がその遺言状において「ウィンザー城聖ジョージ礼拝堂のヘンリ6世の墓所および祭壇を朕の費用でもって、もっと立派なものにするように」希望したように⁽⁶¹⁾、再移葬計画も放棄された。その結果、ヘンリ6世の遺体はウィンザーにとどまり、ウェストミンスターに新築された礼拝堂は、現在ヘンリ7世礼拝堂となっている。

以上のように、王権側によるヘンリ6世崇敬推進政策は、宗教改革の開始とともに放棄されたが、民衆の間での崇敬はしばらく存続した。しかし、1543年にデヴォンやコーンワルからの巡礼者の群れが、手に手にキャンドルと蠟模型を持ってウィンザーへ向かったとき、「拍車に接吻し、古ぼけた帽子をかぶるためにはるばるやって来るとは、人々は何と無駄なことに財貨を費やしているのか」と、もはや沿道の見目は冷やかなものになっていたのである⁽⁶²⁾。

むすびにかえて

ヘンリ6世崇敬やヘンリ7世による列聖キャンペーンは、従来、ヘンリ7世による王位篡奪を正統化するためのプロパガンダの1つと見なされてきた⁽⁶³⁾が、以上の考察から明らかになったように、ヘンリ6世に対する崇敬そのものは、すでにヘンリ7世の即位以前から広まっていた。ヘンリ6世崇敬の発生そのものは、「殺害された」と信じられた前国王の死の衝撃に対する民衆の反応であった。ヨーク朝成立後も、少なくともかつてヘンリ6世と関わりのあった

人々のあいだに、親ランカスター的心情は存続していた。たとえば、かつてのヘンリの秘書リチャード・アンドルーが、ミンスターにヘンリのための寄進供養禮拜堂を建て、あるいはブラクマンがヘンリ6世伝を著作したように。なぜなら、ブラクマンが書いたように、「他の者が平和裡に王国を所有するために、[ヘンリ6世は]暴力的な死を被った」にもかかわらず⁽⁶⁴⁾、すなわち王国の平和のためにヘンリの生命を犠牲にしたにもかかわらず、平和は戻らなかったからである。こうしたヘンリ6世への追慕とヨーク王権に対する反感から、ヘンリ6世崇敬が民衆の間に発生し、王権側の禁令や批判にもかかわらず、拡大したと考えられる。そのため、リチャード3世はヘンリ6世崇敬を保護することによって、民衆の支持を得ようとしたのである。

このような既存の崇敬を、ヘンリ7世も積極的に利用した。その方法は、先のランカスター朝のヘンリ4世がランカスター伯トマスを崇敬し、ヨーク朝のエドワード4世がヨーク大司教スクロップを崇敬した前例⁽⁶⁵⁾に倣うものであった。これら王たちと同様に、とりわけ正統性の疑わしかったヘンリ7世は、自らに繋がりのある「聖なる叔父」ヘンリ6世への崇敬を利用して、自身の王権の聖化に努めたのである。その点でヘンリ7世は、ついにヘンリ6世の列聖は実現しなかったものの、フランスのカペー朝が聖ルイを擁し、アンジュー朝のヘンリ2世がエドワード証聖王という王朝聖人を創出したように、死んだ聖人王の威光を利用するという中世的な伝統のなかにあったといえよう。

この伝統は、息子ヘンリ8世にも当初は受け継がれた。しかしながら、男子直系への王位継承に成功したことによって、テューダー王朝は一応、安定したといえる。言うまでもなく、直系相続人への継承は、新しい王朝の安定化にとって重要であった。かつてヘンリ4世の篡奪によって成立したランカスター王朝は、3代目のヘンリ6世が生後9ヶ月の幼児であったにもかかわらず、問題なく継承されている⁽⁶⁶⁾。一方で、逆にヨーク朝はエドワード4世の男子直系への相続に失敗し、リチャード3世による王位篡奪を招いたことが、最終的にヨーク朝の崩壊につながったのである⁽⁶⁷⁾。ヘンリ8世が男子を得ることを切望したのは、テューダー朝の2代目としての彼の立場からして当然であった。そしてヘンリ8世は、教皇庁と絶縁し、宗教改革を進めていくことになる。宗教改革の過程で、聖人崇敬の重要な基盤であった修道院は解散され、多くの聖遺物も没収、焼却された⁽⁶⁸⁾。これにともなって、王朝聖人の創出によるテューダー朝の聖化という手段も、使えなくなった。一方で、16世紀以降、ますます生身の国王の身体に神秘性や聖性が付与されるようになっていた。たとえば、国王は、ますます宮廷の奥へと隠れるようになり、神秘性を増していく。その結果、雪隠係のような王の肉体に奉仕できる召使が、宮廷内で重要になっていった⁽⁶⁹⁾。そして王権神授説が浸透していくなかで、ヘンリ3世以来おこ

なわれてきた療癒治癒の触手は、むしろステュアート朝下で多用されるようになった⁽⁷⁰⁾。

こうしてヘンリ 8 世に始まる宗教改革によって、聖人崇敬全般のみならず、中世的な死んだ聖人王の威光の伝統までも失われたことで、イングランド王権は、新たに生身の国王の神秘性を強調する「近代的」王権へと転換することになったのである。

注

- (1) とくに J. Watts, *Henry VI and the Politics of Kingship*, Cambridge, 1996; C. Carpenter, *The Wars of the Roses: Politics and the Constitution in England, c. 1437–1509*, Cambridge, 1997.
- (2) 近年でも、ヘンリ 6 世の没後 500 周年を迎えたことなどから、1970 年代に再び彼の列聖を求める動きがあった。R. A. Griffiths, *The Reign of King Henry VI: the exercise of royal authority, 1422–1461*, Berkeley, 1981, p. 1.
- (3) 「政治的聖人」の崇敬については別稿でその一端を考察した。拙稿「中世後期イングランドにおける政治的聖人崇敬」『史遊』第 9 号, 2001 年。
- (4) A. R. Myers, ed., *English Historical Documents*, vol. 4. 1327–1485, London, p. 317–319.
- (5) *Calendar of State Papers and Manuscripts, Milan, 1385–1618*, no. 220, pp. 156–157.
- (6) N. Pronay & J. Cox, eds., *The Crowland Chronicle Continuations 1459–1486*, London, 1986, pp. 128–129.
- (7) J. O. Halliwell, ed., *A Chronicle of the first thirteen years of the reign of King Edward the Fourth*, by John Warkworth, Camden Society, old series 10, 1839, p. 21.
- (8) A. H. Thomas & I. D. Thornley, eds., *The Great Chronicle of London*, London, 1938, p. 220.
- (9) J. Bruce, ed., *Historie of the Arrivall of Edward IV in England and the Final Recouerye of his Kingdomes from Henry VI*, A. D. M. CCCC. LXXI., Camden Society, old series 1, 1838, p. 38.
- (10) *Ibid.*, pp. 1–2. ヨーク派年代記については、C. L. Kingsford, *English Historical Literature in the Fifteenth Century*, Oxford, 1913, chapter VII 参照。
- (11) T. Wright, ed., *Three Chapters of Letters relating to the Suppression of Monasteries*, Camden Society, old series 26, 1843, p. 222, 224.
- (12) J. Raine, ed., *The Fabric Rolls of York Minster*, Surtees Society 35, 1859 [以下, *Fabric Rolls*], p. 82. および、前掲拙稿, xxi ページ, 注 (87) 参照。
- (13) *Fabric Rolls*, p. 301.
- (14) R. Lovatt, 'A Collector of Apocryphal Anecdotes: John Blacman Revisited', T. Polard, ed., *Property and Politics: Essays in Later Medieval English History*, Gloucester, 1989, pp. 176–181.

- (15) *Collectarium Mansuetudinum et Bonorum Morum Regis Henrici VI ex collectione Magistri Joannis Blakman*, in M. R. James, ed., *Henry the Sixth, A reprint of John Blacman's Memoir*, Cambridge, 1919 [以下, *Blacman*].
- (16) *Calendar of Close Rolls, 1468–1476*, pp. 298–299.
- (17) J. Raine, ed., *Historians of the Church of York, and its Archbishops*, Rolls series 71, vol. 3, London, 1894, pp. 336–337.
- (18) B. Spencer, 'King Henry of Windsor and London Pilgrim', J. Bird & c, eds., *Collectanea Londiniensia : Studies presented to Ralph Merrifield*, London, 1978, p. 241.
- (19) 前掲拙稿, xii ページ。
- (20) T. Hearne, ed., *Joannis Rossi Anriquarii Warwicensis Historia Regum Angliae*, Oxford, 1716, cited in A. Hanham, 'Henry VI and his Miracles', *The Ricardian : Journal of the Richard III Society*, vol. 12, no. 148, p. 640.
- (21) 青山吉信『聖遺物の世界 中世ヨーロッパの心象風景』山川出版社, 1999年, 42–44 ページ。
- (22) 尾野比左夫『リチャード三世研究』溪水社, 1999年, 12 ページ。
- (23) B. Wolffe, *Henry VI*, London, 1981, paperback, 1983, p. 352; J. W. McKenna, 'Piety and Propaganda: the Cult of King Henry VI', B. Rowland, ed., *Chaucer and Middle English Studies in honour of Rossell Hope Robbins*, London, 1974, pp. 75–76.
- (24) Spencer, *op. cit.*, p. 237.
- (25) *Ibid.*, pp. 238–239.
- (26) 詳細なカタログは, Do., *Pilgrim Souvenirs and Secular Badges : Medieval Finds from Excavations in London*, London, 1998, pp. 189–192. また, 前掲拙稿, 末尾の図Ⅱも参照。
- (27) Spencer, *Pilgrim Souvenirs and Secular Badges*, p. 6; Wolffe, *op. cit.*, left to p. 341; E. Ettlinger, 'Notes on a Woodcut depicting King Henry VI being invoked as a Saint', *Folklore*, 84, 1973, right to p. 116. および前掲拙稿, 図Ⅲ参照。
- (28) J. P. Colloer, ed., *Trevelyan Papers, prior to A. D. 1558*, Camden Society, old series, 67, London, 1857, pp. 57–58.
- (29) J. T. Fowler, ed., *Memorials of the church of SS. Peter and Wilfrid, Ripon*, Surtees Society 81, vol. 3, 1888, p. 264; P. Grosjean, ed., *Henrici Angliae Regis Miracula Postuma*, Bruxelles, 1935 [以下, *Miracula*], prolegomena, pp. 251*–255*.
- (30) *Miracula*, pp. 1–307 は, *MS. British Museum, Rex 13 C. VIII* を刊行したものである。同一のマニユスクリプトから一部英訳して刊行されたものとして, F. R. Knox & S. Leslie, eds., *The Miracles of King Henry VI*, Cambridge, 1923 がある。
- (31) *Miracula*, prolegomena, p. 24*.
- (32) *Miracula*, prolegomena, pp. 1*–2*.
- (33) Knox & Leslie, *op. cit.*, p. 20.
- (34) Hanham, *op. cit.*, p. 647.
- (35) Knox & Leslie, *op. cit.*, p. 26.

- (36) E. Duffy, *The Stripping of the Altars: Traditional Religion in England 1400–1580*, New Haven & London, 1992, chapter 5; 青山, 前掲書, 193 ページ。
- (37) 前掲拙稿, viii ページ。
- (38) *Miracula*, pp. 122–123 (no. 46).
- (39) *Miracula*, pp. 185–190 (no. 106).
- (40) 前掲拙稿, xiv–xv ページ。
- (41) *Miracula*, p. 231–234 (no. 127).
- (42) *Miracula*, pp. 205–206 (no. 113).
- (43) *Miracula*, pp. 114–115 (no. 42).
- (44) 青山, 前掲書, 164–167 ページ。
- (45) *Miracula*, pp. 247–250 (no. 135).
- (46) *Miracula*, pp. 234–236 (no. 128).
- (47) *Miracula*, pp. 224–226 (no. 126).
- (48) 前掲拙稿, iv ページ。
- (49) ヘンリ 7 世の祖父が, ヘンリ 6 世の母后カトリーンと内縁関係にあったオウエン・テューダーであることから, ヘンリ 7 世の父エドモンドはヘンリ 6 世と異父兄弟であった。
- (50) D. Wilkins, ed., *Concilia magnae Britanniae et Hiberniae*, Bruxelles, 1964, vol. 3, p. 640; C. Gasquet, *The Religious Life of King Henry VI*, London, 1923, pp. 76–78.
- (51) Gasquet, *op. cit.*, p. 87.
- (52) T. Rymer, ed., *Foedera, Conventiones, Litterae*..., London, 1704–1717, vol. 12, pp. 563–565; L. Smith, ‘The Canonization of King Henry VI’, *Dublin Review*, 4th series, 168, 1921, p. 48.
- (53) Smith, *ibid.*, pp. 48–49; McKenna, *op. cit.*, pp. 80–82.
- (54) McKenna, *op. cit.*, pp. 82–83.
- (55) N. H. Nicolas, ed., *Privy Purse Expenses of Elizabeth of York*, London, 1830, reprint, 1972, p. 3. なお, 1513 年サマセットのリチャード・コックスの遺言状においても, テュークスベリのエドワードへ 4 ペンスが遺贈されたように, 1471 年にテュークスベリの戦いで戦死したヘンリ 6 世の皇太子エドワードは, 父王の崇敬が高まるにつれて, 民衆の崇敬対象となっていた。N. J. Rogers, ‘Cult of Prince Edward at Tewkesbury’, *Transactions of the Bristol and Gloucestershire Archaeological Society*, 101, 1983.
- (56) Smith, *op. cit.*, p. 51; Gasquet, *op. cit.*, p. 90.
- (57) *Blacman*, preface, p. xi.
- (58) *Fabric Rolls*, p. 97.
- (59) *Letters and Papers, Foreign and Domestic, of the reign of Henry VIII*, vol. 4, p. 1841 (no. 4167).
- (60) Colloer, ed., *op. cit.*, p. 153.
- (61) Rymer, ed., *op. cit.*, pp. 110–111.

- (62) Smith, *op. cit.*, p. 52.
- (63) McKenna, *op. cit.*, p. 72.
- (64) *Blacman*, pp. 19, 41.
- (65) 前掲拙稿, viii, x-xi ページ。
- (66) ブラクマンが、生前のヘンリ6世自身の言葉として「私の父はイングランド国王であり、その治世を通じて平和に王冠を所有した。私の祖父も同王国の王であった。私は揺籠のなかの赤ん坊であったが、平和裡に、抗議されることもなく、戴冠し、王国全体から王として認められ、約40年間イングランドの王冠を着けていた……」と書いたように、同時代人にも認識されていた。*Blacman*, pp. 21, 44.
- (67) Carpenter, *op. cit.*, p. 257.
- (68) これを見た民衆の信仰が、どの程度影響を受け、変化したかについては、議論のあるところであるが、たとえば E. ダフィは伝統的信仰の根強さを強調する。*Duffy, op. cit.*, pp. 4-5.
- (69) 井内太郎「国王の身体・儀礼・象徴－テューダー絶対王政期における国王権力の象徴過程」岡本明編著『支配の文化史－近代ヨーロッパの解説－』、ミネルヴァ書房、1997年、20-27 ページ。
- (70) マルク・ブロック（井上泰男／渡邊昌美訳）『王の奇跡』刀水書房、1998年、413-424 ページ。

(関西大学非常勤講師)